



自閉症スペクトラム児の遊戯療法 — 「『自閉症的不安』を乗り越える」という視点から—

古市, 真智子

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2016-11-18

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙第3318号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2003318>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

氏名 古市真智子
専攻 人間発達環境学研究科
推薦教授氏名 吉田圭吾 教授

論文題目

自閉症スペクトラム児の遊戯療法－「『自閉症的不安』を乗り越える」という視点から－

論文要旨

序章では、問題と目的を述べた。現在、自閉症スペクトラム（以下、自閉症）に対する社会的な関心は高く、特に、知的障害を伴わないタイプへの対応が求められている。彼らに対してさまざまな心理教育的支援が行われているが、適応スキルの獲得や外的状況への支援に比べて、遊戯療法の実践・研究は極めて少ないのが現状である。遊戯療法に関する議論は十分になされてきたとはいえないにもかかわらず、遊戯療法は自閉症児には効果がないという考えが主流ともいえる。このような現状に対し、今日、自閉症児の遊戯療法を見直そうという動きが出てきている。従来の遊戯療法の枠にとらわれることなく、自閉症に合わせた遊戯療法のあり方を探ろうという動きである。これらの一連の研究と、事例研究によって個々にこれまで提示されてきた意義や視点などを合わせると、自閉症児の遊戯療法は、「自己・私・主体」を生成し、象徴機能を獲得していく場として寄与できることが示されてきている。これらを参考にしながらも、本論文は、独自の観点から自閉症児の遊戯療法の可能性を探究することを目的とするものである。

まず、自閉症児の遊戯療法における現代的課題を明らかにするため、歴史的変遷を概観した。我が国の自閉症の治療において、非指示的遊戯療法は、最初で唯一の治療法として 1960 年代に全盛の時代を送ったが、その後、自閉症の原因論の変遷とともに、様々な心理的治療法、教育方法、教育・福祉的制度が生み出されていく中で、強い批判を受けることとなった。遊戯療法への批判的意見は、①遊びのイメージ表現と象徴的理解の不成立、②日常生活との不連続性、治療中心主義による混乱、③非指示的・絶対受容の不適合と養育者への非難・偏見の増長、という点にまとめることができ、それぞれが残した検討すべき課題を以下の〔課題 1〕～〔課題 3〕として提示した。そして、本論文の目的を、〔課題 1〕～〔課題 3〕を検討したうえで、臨床的仮説モデルを生成することとした。

〔課題 1〕 自閉症児の遊びとその過程を理解する視点

〔課題 2〕 生活における遊戯療法の場の特性

〔課題 3〕 セラピストの積極的関与のあり方

第 1 章では、〔課題 1〕「自閉症児の遊びとその過程を理解する視点」を検討した。本論文における自閉症の基本的理解として、「『関係を結ぶ力』の相対的な遅れ」と「共同世界への参入の遅れ」を挙げ、これに対する遊戯療法の基本的態度は、「人との関係の不足を埋めること」

と「共有体験によって共同世界へと導くこと」であると述べた。そして、このような基本的理解と態度で、「遊びを通して発達を促す」という滝川(2004, 2008)の遊戯療法論に依拠しながら遊戯療法を行っているとき、遊戯療法の効果は、発達の危機を乗り越えたという実感から得られるものがあると述べた。自閉症児が生来的本質的に抱えている問題は、さまざまな不安や恐怖を生む。これらは発達水準によって変化しながら、自閉症児の心や発達に危機的状況をもたらす。本論文では、このような自閉症児の精神発達の過程において生じる自閉症児特有といえる不安や恐怖を「自閉症的不安」と呼び、「共同性の未獲得による自閉症特有の(あるいは過度の)発達の危機的状況に付随する不安や恐れ」と定義した。そして、「自閉症的不安」を乗り越える過程がみられる事例が筆者に遊戯療法の効果を実感させると述べた。滝川(2004)の精神現象論を用いると、「人への依存を通して不安を乗り越えること」は、すなわち、「共同性へと歩むこと」である。したがって、「『自閉症的不安』を乗り越える」という視点は、「共同世界への参入の遅れ」を本質とする自閉症児の精神発達をとらえる視点であると主張した。また、「自閉症的不安」の防衛から、周囲の世界と関係をもつ場をもたない「非現実」の世界で安全感を得ようとする状態を【遮断世界】と仮定し、遊戯療法過程は、【遮断世界】からセラピストとの関係性を通して「自閉症的不安」を乗り越え、共同世界へと歩む過程という視点からとらえることができると論じた。このように、〔課題1〕について、「『自閉症的不安』を乗り越える」という視点が導出された。

第2章から第6章では、本論文が考える「『自閉症的不安』を乗り越える」遊戯療法とはいかなるものかを5つの自験例によって示し、各々について事例研究を行った。自閉症に典型的な症状や行動が問題としてみられた、年齢や知的水準が異なる5つの事例で構成し、各章では、各々の事例について考えられる「自閉症的不安」とは何か、それを乗り越えて行く過程において展開された遊びや関係性、発達の変容について明らかにした。

第2章では、「感覚やモノへの不安」がみられた知的障害のある自閉症男児の事例を検討した。遊戯療法では、遊びを通してセラピストへの愛着を形成し、セラピストを「不安に立ち向かう安全基地」として不安なモノに立ち向かっていく過程がみられた。セラピストがクライアントにとって「不安に立ち向かう安全基地」となるためには、快の情動を共有する遊びが基盤となった。また、クライアントは母親との関係において形成していた内的ワーキングモデルをセラピストとの関係においてなぞっており、このことは母親との関係を補強し、クライアントにより濃く位置付けることになったと考えられた。

第3章では、「規則性のない『人』とかかわることへの不安」が想定された高機能自閉症男児事例を検討した。遊戯療法では、規則性のある「数字」の世界でセラピストと遊ぶことを通して、規則性のない「人」ともかかわる道が開かれていった。クライアントにとって数字は①安定の基盤として②愛着対象として③移行対象—自閉対象として機能していると考察され、数字をポジティブに共有しようとするセラピストのかかわりが、クライアントと数字との関係に質的変換(自閉対象から移行対象へ)を促し、心理的発達を高次段階(感覚刺激的段階から対物、対人関係段階へ)に導くと考えられた。

第4章では、「母子の外的世界への不安」が想定されたアスペルガー症候群男児の事例を検討した。遊戯療法では、母親との分離の時間をセラピストと過ごしたことを契機として、母親との閉塞的な二者関係の世界が外界へと開かれていく過程がみられた。セラピストは、母子の閉塞的二者関係が破られる瞬間に立ち会い、二者関係が外界へと開かれていく歩みを支える役

割があった。クライアントが母子の外の世界へと歩み始めるためには、分離という激しい痛み
の感情を外界の代表・表象であるセラピストに抱えられ鎮められることによって、感情を外に
跳ね返すのではなく自己の内側へと収めていく体験や、セラピストと外界を見回しながら安全
な時間を過ごすという体験が重要であった。セラピストには、クライアントに内と外を実感さ
せ、外界の代表・表象としてそこが安全であることを示す役割があったと考えられた。また、
母親に対しては、クライアントの激しい癩癩に破壊されながらも「生き残ること」の過程を、
伴走しながら支える役割があったと考えられた。

第 5 章では、「『個』として世界に存在することへの不安」が想定された広汎性発達障害
男児の事例を検討した。遊戯療法では、母親のいる待合所を拠点として自転車や三輪車などに
乗って移動することが主であった。遊びの内容に変化は見られなかったが、乗り物やコースを
変えながら、徐々に拠点から離れている時間を伸ばしていく過程がみられた。この過程は、ク
ライアントの心の中に拠点が内在化されていく過程であり、「対象の内在化」と「自己の対象
化」という作業が進められたと考えられた。クライアントが「個」として安心して外界を探索
するためには、振り向けばいつもセラピストがいて、自己を肯定的に映し、安全を承認して
もらうことが重要であった。セラピストには、クライアントの分離不安をしっかりと抱え受ける
移行対象の役割があったと考えられた。

第 6 章では、「周囲の世界に合わせて生きることへの不安」が想定された運動発達の遅れ
を伴う広汎性発達障害男児の事例を検討した。クライアントの制作した箱庭の内容と構造には、
混沌とした世界が「同質－異質」「普通－奇異」などの相対性を軸に整理されていき、まと
まりのある世界へと変化していく過程がみられた。この過程においてクライアントは、セラピ
ストとのズレない関係の中で、「情動調律」や「共同注意」といった原初的な「養育者－子ども」
関係を体験し、言葉が身体とつながること、自己と世界の対象化、主体としての実感などの作
業をしたことが重要であったと考えられた。

第 7 章では、第 2 章～第 6 章を総合して検討し、〔課題 2〕「生活における遊戯療法の
場の特性」、〔課題 3〕「セラピストの積極的関与のあり方」の考察を行い、「『自閉症的
不安』を乗り越える遊戯療法」の臨床的仮説モデルを提示した。

まず、〔課題 2〕「生活における遊戯療法の場の特性」について考察した。クライアントの
生きる場を「日常－非日常」「現実－非現実」の2軸で表すと、生活の場は「日常」かつ「現
実」の場といえ、これを【共同世界】と仮定した。【共同世界】は、自閉症児に「自閉症的
不安」を感じさせる、これから歩み入ろうとしている共同性の高い世界である。【遮断世界】に
いるクライアントとの間に関係が生じるためには、まず、クライアントが【共同世界】に対
する不安から解放され、プレイルームがクライアントの内側から身体の外に広がっていくよ
うな世界となるようにしなければならなかった。クライアントにとってプレイ空間は、【共同
世界】ではなく、「非日常」的な時空間としてとらえられる必要があり、遊戯療法の場は、【共
同世界】に対する不安から解放された世界としての「非日常性」と、【遮断世界】から出て
現実世界に存在するという意味での「現実性」を合わせもつ場として機能することが必要
であると論じられた。このように、自閉症児の生活において、遊戯療法の場は、「非日常」
－「現実」の世界で、内側からありのままに共同世界へ向かって一歩先を生きる場であり、
【共同世界】の前体験をする【前共同世界】として位置付けられると論じた。

次に〔課題 3〕「セラピストの積極的関与のあり方」について考察した。セラピストは、ま

ず、クライアントのありのままの生き方に同調、同行しようとする事、情動を快の方向に動かすようなかわりをする事を基本として、クライアントの広げる固有性の高い世界に参入しなければならないことを示した。次に【前共同世界】では、①原初的「養育者-子ども」関係の体験を提供すること、②「変わらない」遊びの世界を共有することで変化を起こすこと、③クライアントの能動に安全を乗せて肯定的に映し返すことが必要であることを明らかにした。

以上のことを総合して、「『自閉症的不安』を乗り越える」遊戯療法の臨牀的仮説モデルを以下のように提示した。クライアントの状態によって、クライアントの生きる世界を【遮断世界】【前共同世界】【共同世界】の3段階に分けて考える。遊戯療法過程は【遮断世界】にいるクライアントが【前共同世界】でのセラピストとの関係や遊びを通して、【共同世界】へと歩む過程である。【遮断世界】は、現実世界とつながりを持たない、個体内に循環完結する、非現実な世界であり、【共同世界】は、自閉症児に「自閉症的不安」を感じさせる、これから歩み入ろうとしている共同性の高い現実世界、【前共同世界】は、クライアントの個体の外に広がる、内側から生きることが出来る固有性の高い世界である。クライアントを【遮断世界】に閉じさせるのは、【共同世界】に対する不安である。クライアントがプレイルームに【共同世界】を感じなければ、【遮断世界】にいる必要はなくなり、内側から能動性を発揮し、志向する先をプレイ空間に広げる。【前共同世界】はこのような固有性の高い世界にセラピストが参入した世界であり、ここでは、セラピストはクライアントに並び立ち、クライアントが「頭一つ抜け出る」ための作業に伴走する役割を担う。【前共同世界】は、クライアントが【共同世界】へと歩み入るために必要なものだけが外界から浮かび上がるシンプルな体験世界であり、そこで求められるセラピストのかかわりは、①原初的「養育者-子ども」関係の体験を提供すること、②「変わらない」遊びの世界を共有することで変化を起こすこと、③クライアントの能動に安全を乗せて肯定的に映し返すことである。クライアントがセラピストと【前共同世界】を生き、当初の「自閉症的不安」を乗り越えたとき、クライアントの内外に広がる世界は、共同性を帯びている。

最後に、「自己・私・主体」の生成を目指す遊戯療法論と本モデルとの連関について、「自己・私・主体」がない状態と【遮断世界】、「融合と分離」と「共有」の観点から検討し、本モデルの限界について、プレイ中に強度行動障害がみられる場合などを挙げた。

終章では、本論文の成果と今後の課題を述べた。

引用文献

滝川一廣 (2004). 「こころ」の本質とは何か. ちくま新書.

滝川一廣 (2008). 発達に遅れをもつ子への遊戯療法を考える. 遊戯療法学研究, 7(1), 23-34.